

幼児教育実際指導研究会

分科協議会より

自

然

指導

坂元 彦太郎

阿久沢 栄太郎

自然と幼・小教育

坂元 先生がたの中には、自然の領域を小学校の教科目と同じように解している人が多いと思います。しかし幼稚園の教育内容の前がきにもあるように、幼稚園の時代は、まだ教科というわくをもって学習される段階ではありません。むしろ子どもの自然な生活指導の姿で、各項目でねらう内容

を身につけさせようとすべきでしょう。各項目は、どれも小学校とつながるわけです
が、單に、小学校より範囲の狭い、また程度の低いものだと考へてはなりません。とにかく、幼稚園の先生は「幼稚園でやったことを二度やつてくれてもよいではないか」と思っています。これは「自然」の意味の本質をつかんでいます。幼稚園では、自然に対する愛情を経験して、動植物との交流をもつことをねらいとします。ところが小学校になると、子どもの「自然」に渡する経験のしかたが科学的なものに変つていきます。そこです、幼児らしく自然と親しみで、次の段階の基礎をつくつておかなければ

例えば草花の栽培についてみると、小学校の先生の中には「幼稚園ではどんな草花

ばなりません。自然に対する幼児の擬人的態度は科学的ではありません。しかし自然に度する愛情をじゅうぶん経験すれば、学校の新しい質のものによく転換することが出来て科学的態度が身についていきます。

幼稚園教育要領の「自然」の望ましい経験には「身近な自然の変化や美しさに気づく」とありますが、この中に「おたまじやくしなどの変化をみたり絵を描いたりする」と、小学校の目標とほとんど違わないことが書かれています。しかし、こんなことは幼児には無理なのであって、幼児が将来なってほしい姿を書いたのでしょうか。

以上のような意味から、小学校とのつながりや質的違いを考えながら、お話をすすめましょう。

小学校の理科教育と幼稚園への要望

阿久沢 幼稚園教育施行令七五条をみますと、「保育日数、時間数は保育要領の規則

により園長が決める」となっています。また、幼稚園教育要領の「自然」は、小学校における八教科とくらべて、融通性があります。また、幼稚園設置基準十条に、「幼稚園には保健衛生、飼育栽培用具をそなえる」という項目がありますが、この飼育栽培ということは、小学校では継続して行われます。

一般に幼稚園から小学校に入学した子どもは、概念的なことをよく知つていながら本当に目でみたというものが少ないようです。それは、絵本やおとなの話から得た知識が非常な分野を占めているからでしょう。幼児期から小学校一年生ぐらいの子どもに絵を描かせてみると著しい特徴がみられます。

小学校二年の五月、汐干狩に行つた直後のように絵を描かせたところ、貝を取扱つたものは一つもありませんでした。小学校一、二年生は先生の希望したものを必ず描かないのです。あるものを対象としてみないで主格未分化で、付録物の方が大きいのです。分化してくるのは、一年のなかばを過ぎてから、一年生は幼稚園につけた方がよいと思われます。

おたまじやくしの観察をしても、幼稚園の子どもは、おたまじやくしを描くよりも、それを観ている自分や友だちを描くのが普通です。この状態を脱却しないと継続観察は出来にくいのです。小学校に入つてからもこのことは言われますので、私は継続的観察に入るために次のような方法をとっています。

「皆さんの家には家族が何人いますか」と聞くと、子どもたちは喜んで発表します。そこで「おじいさんやおばあさんのいる人は、お家へ帰つて、どんなことをしているいらっしゃるか絵に描いていらっしゃい」というようにして、家族全部の絵

を一日にひとりずつ描いて表の中にはります。そして、楽しかったことや、けんかしたことなどの話を発表したり聞いたりします。

このような方法で、継続した仕事に楽しみを覚え、それから徐々に生きものの自然観察に入っていきます。

次に、自分が飼っている可愛い動物について、大きさや色などの話をさせて、興味の度合を確めてから、自分や近所の家の犬や猫のおもしろいところを描き、説明しなければわからないものは字で描いて来させます。「もつと描ける」と言つてとても喜んで来ます。そこで先生は「では明日も違つたところを描いていらっしゃい」という具合になります。時間をあまりかけないで毎日続けさせ、出来た絵をまとめてはるようになります。これは自然観察の経験です。

三年生ぐらいになると分化して“ねらいうち”と称するものが始まります。先生がはじめからねらいを示してやらせるので

す。動物の運動ということで、犬や猫歩きかたを毎日一枚ずつ家で描かせ、それによって、いろいろな歩きかたや見かたがあることがわかつて、生態的な面や形態的な面を理解していきます。これは子どもにしつけるのではなく、子どもが内にもつているものを育していくのであつて幼稚園でも同じでしよう。

四年生ぐらいになれば程度が上ってきます。ある子どもは、自分の家で飼っている

三羽のひよこの重さの変化、与えた餌の量などを七月二十二日から八月二十五日まで記録したので、グラフに書かせました。

また、標本との差異点をみつける視覚的領域つまり観察を、小学校入学のときと六年卒業のときにおこなつてみました。その

結果、観察は幼稚園でもある程度発達しているけれども、経験的領域はのびていないで、小学校六年間に非常にのびていること

のさせかたを考えなければならないことがわかるでしょう。幼稚園では、生活の中で自然の事物・現象を体験させ、子どもの状態に合うようにとり入れていくことが大切だと思われます。

本をみたり、両親に教えられて知るようになるというのは危険です。「狐はコンコンと鳴く」と教えられていると、本当に狐が鳴いても狐と思わないという結果になるからです。

「子どもと八百屋に行つたとき、「りんごはどこで出来る」の問題に対して子どもは「八百屋」と答えた

この場合、経験を豊かにするだけではじゅうぶんで、経験の順序や方法を考えなくてはならないと思います。

「風呂に入ったとき、湯に手を入れた子どもが「あれ！ 手が縮んでしまった」と言つた。「だしてごらん」と言うと、大きくなるのでふしげがる。これに解決を与えないで、食後に湯のみの中に箸を

入れさせる。子どもは「こわれちゃつた」と言つた

これは、これでよいのだと思います。

子どもには解決の出来ないことがあり、子どもなりの考え方をするのですから。

要するに小学校では教科に分けて指導するのですが、幼稚園から来た子どもの中には、実際にものを観ていない子どもが多いので、経験を豊富にさせることが必要です。

自然観察の範囲

A 虫めがねや磁石を、いつでも子どもが使えるように置いてあるのですが、みるまま使うままにしておいて良いのか?また知能の高い子や教育に熱心な家庭の子どもなどからは「先生、磁石はどうしてくつつくか知ってる?」と聞かれますが、このようなときどうしたらよいかわかりません。

B 自然と身近に接することの出来る地方では、自然物について質問されることが多い

のですが、どの程度答えてよいのかわからぬので迷ってしまいます。

坂元 むずかしい質問には「ああそう」と聞き流してよいのではないかと私は思います。磁石を使って楽しめる子どもの方が幸福で、それをばしらよいと思います。

磁石は何故ひきつけるかとか、星は何故落ちないかと聞く子どもには、この態度を否定することは悪いですが、「ふしぎねー」といっしょになつてふしぎがり、むずかしい抽象的な答を与えない方がよいですね。

阿久沢 虫めがねは教科書では小学校二年から出でます。磁石は一年の二学期から三学期に使いますが、内容は磁石の働きについてが主で、その性質については三年になつてから学び、磁石につく物とつかない物があることを知ります。このとき結論は与えないのでおきます。夏なら、もち桿の先にもちの代りに磁石をつけ、せみとりをするのもおもしろいでしょう。とにかく、幼稚園では遊び道具として使うのがよいと思

います。

疑問に対しても、あまりはつきりした答を

与えたり、またその疑問が親に従順であるためというような不自然な場合だつたりすると、本当に疑問をもつて楽しく理科を学ぶようにはなりません。私はどの程度までということはあまり考えなくてよいと思します。

C 子どもがどのような気持で質問を出しているかをよく察してから態度を決めるのも一方法だと思われます。物知りを示したいような子どもには、先生の方から「どうしてなの」と聞いてみてもよいように思います。

環境と自然観察の指導

A 自然の環境に恵まれていて、放りっぱなしになりがちなのですが、人為的環境を作らなくてよいでしょうか?

B 私の園は、でんでん虫やカニなどを自由に取りに行けるような環境に恵まれてい

ます。

しかしそれだけでは興味が続かないの
で、皆で取りに行き「皆の幼稚園のでんで
ん虫」というようにして保育室で飼い、お
弁当の時にも「でんでん虫さんにも先にご
ちそうをあげましょ」と言つて草花をあげ
たりして愛情を培つています。

勿論、とりすぎないように注意はしてい
ます。

坂元 先生と子どもがいつしょになつて自
然をとり入れること、それから外の自然を
幼稚園にとり入れることはたいへんよい方
法ですね。しかし植物の場合、自然を百
%利用すべくそつくりそのままもつてくる
わけにはいきませんから、栽培によつて適
当にとりいれる必要があるでしょう。

C 園に欠けているものを常に考えること
によつて、「自然」の場の設定もできてくれ
るのではないか。またねらいとする
ものを幼児に直接教えるのではなく、先
生が必要な程度というものを定めて、それ

を幼児に意識づけるようにしむければよい
と思います。

阿久沢 子どもが手当たり次第つかまえてきて
飼うということは危険です。生物の存在
価値を認め、その生命を保護することが今
日叫ばれています。ですから、必要な数
量だけとり、またとつてはいけものもある
ということを教えておかなければなりません。
ん。

また自然観察のねらいは高くしてはいけ
ません。小学校でも入学当初は、生活の中
での方向づけ程度です。

幼児期の自然に対する興味・

関心と年令

A 同じ質問に対して年長児は満足しない
場合が多いのですが、疑問の差は経験とか
発達の差と考えてよいのですか。

ある女児が絵本で虹を知り、母親からは
雨後に出るものだと教えられ、その後、雨
があがると必ず空をみあげて、出でていない

ときには「どうして出ないの」と聞いたり
しますが、……。

坂本 年少児から年長児への発達は、適切
な指導のもとでは確かにめざましいので
す。

しかし、虹の例は、正しい発達からきた
ものだとは思えません。虹をまず本で知つ
てしまつたのが不幸です。幼児は、虹や雲
にはそれほど興味をもたないと思うのです
がそれでよいのです。無理に関心をもたせ
ようとしたり、本をみせたりする必要はあ
りません。

けれども、子どもが感動したときにはい
つしょに感動してやることは大切です。

